
遊戯王 ~黒き火炎~

満足死

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王～黒き火炎～

【Zコード】

Z7540K

【作者名】

満足死

【あらすじ】

主人公の黒木氣炎は、気がついたら遊戯王GXの世界にトリップしていた。しかも手元にあつたのは自分が実際に使っていたネタデッキで・・・。

第一話 入学試験（前書き）

かなり分かりにくい部分があるかもしれません、ご了承下さい。

第一話 入学試験

気がついたら海馬ランドの目の前にいた。

どういう状況か落ち着つきを取り戻したときに確認したところ、
海馬ランドには『デュエルアカデミア本校受験会場』と記された看
板があった。

自分のポケットには、デッキと受験番号が控えた紙があった。

『受験番号98番』

〇一二

ここまで受験番号が低いとは。

落ち込んでいると、受付の方から声が聞こえた。

「受験番号110、遊城十代！セーフだよね？」

ヤバイ！十代が来たってことはギリギリじゃないか！

「すいません！俺も受験生です！」

どうにかギリギリ間に合つことができた。原作知識があつても何も
知らない世界で中卒・浪人はきつ過ぎる。

「お前も受験生か、よろしくな！俺は遊城十代！」

「俺は黒木氣炎。お互いがんばって合格しよう！」

十代はもう主人公だから合格確定だからいいよな。俺なんて突然ト
リップして先が思いやられるつて言うのに。

三沢のデュエルの終了し、十代のデュエルが開始された。

「おい君、いいのか？あいつのデュエルを見なくて。」

三沢だー！空気王だー！エアーマンだー！

まあデュエルの結果は分かりきっているしこの世界に来たばかり
でデッキの確認をした方が有意義だと思つた。

「多分あこつは勝つと思つし、自分の状態を万全にした方がいいと思つてや」

「なるほど、自分のこともいいが、これからライバルになるかもしれない相手の戦術ぐらい見た方がいいんじゃないか。」

「どうせ『デュエルアカデミア』に入れば『デュエル』できるし、大会なんて一発勝負だから関係ないと思うぜ。」

そういうつて『デッキ』を見る。

待て、これ俺が現実で使つていたネタ『デッキ』じゃないか。これでどうやって戦えばいいんだ。

「ガツチャ！ 楽しい『デュエル』だつたぜ！」

ついに十代の『デュエル』も終わってしまった！『デッキ』編成している間もないぞ！

ええい、もうやけだ！

そう思い、受験会場に急ぐのだった。

「受験番号98番、黒木氣炎です。よろしくお願ひしますー。」

「クロノス・デ・メティチナーノー！」

（あんなドロップアウトボーイに負けるなんて、屈辱ナーノー。）

（こうなつたらこの『デュエル』で名誉挽回ナーノー。）

あれ、俺もしかして十代のせいでのクロノス先生にコテンパンに打ちのめされようとしている？ まあどの道『デュエル』で勝たないといけないわけだから同じか。

「『デュエル！』」

氣炎のターン

「俺のターン！俺はUFOのタートルを守備表示で召喚！ターン終了！」

氣炎	L P 4 0 0 0
手札	5 枚
場	U F O

クロノスのターン

「私のターンデース！ドロー！手札からトロイホースを召喚！さらに速攻召喚を発動！トロイホールは地属性モンスターを生け贋召喚するなら2体分の生け贋になれるノーネ！トロイホースを生け贋に古代の機械巨人を召喚！」

速攻召喚
速攻魔法

手札のモンスター1体を通常召喚する。

「いきなりかよ！というより速攻召喚があるからこっちの世界じゃ一重召喚いらないな。」

「バトルデース！古代の機械巨人でUFOのタートルを攻撃！アルティメット・パウンド！ゴーレムの効果で貫通ダメージを受けてもらうノーネ！」

氣炎	L P 4 0 0 0
	2 2 0 0

「だけどここでUFOのタートルの効果発動！戦闘破壊され墓地に送られたときにデッキから攻撃力1500以下の炎属性1体を攻撃表

示で特殊召喚できる。俺はセカンド・ブースターを特殊召喚！「そんな雑魚を召喚しても無駄ナーノー。これで私のターンは終了デース。」

クロノス

L.P 4000

手札 3枚

場 古代の機械巨人

気炎のターン

「俺のターン！俺がさつき召喚したモンスターが雑魚じゃないことを証明してやるぜ！速攻魔法、手札断殺を発動！」

互いに手札2枚を墓地に送り2枚ドローする。俺はダークブレイズドラゴンと仮面竜を墓地に送る。

「私は古代の歯車と古代の機械獣を墓地に送るノーネ。」

「俺は創世者の化身を攻撃表示で召喚！」

「おい、攻撃表示だと」

「あいつ、もう勝負をあきらめたのか？」

「いいや、こいつこそが俺の逆転への布石だ。創世者の化身の効果を発動する。

このカードを生け贋に創世神を手札から特殊召喚する。出でよ、創世神！

さらに創世神の効果により、手札1枚を墓地に送り、ダークブレイズドラゴンを特殊召喚！

「攻撃力がたつた1200！？どういうつもりナーノー！」

「ダーグブレイズドラゴンは墓地から蘇生された場合、攻撃力が2倍になる！」

そしてセカンド・ブースターの効果！このカードを生け贋に攻撃表

示のダークブレイズの攻撃力を1500アップさせる!』

ダークブレイズドラゴン

攻撃力 2400 3900

「攻撃力が古代の機械巨人を上回ったのノーネ!?」

「バトルだ! ダークブレイズでゴーレムを攻撃! ダークブレイズの効果でゴーレムの攻撃力分のダメージを受けてもらう!」

クロノス

L P 4000 3100 100

「さらに創世神でダイレクトアタック!」

「そんなんあ~。ぐへつ。」

クロノス

L P 1000 0

「ありがとうございました。」

「どうにか浪人せずにするんだ! テュエルアカニアでの生活は不安だけど楽しみだぜ!」

第一話 入学試験（後書き）

こんな感じでいいんでしょうか・・・
先が思いやられます

ダークブレイズの攻撃力の変化が違っていたので変更しました
ご指摘ありがとうございます

第一話 解説＝？（前書き）

一話目からミスとは……
どうかがんばりつと思います

第一話 解説＝？

俺は今『ユエルアカニア』に向かう船に乗っている。

俺は今凄く落ち込んでいる。

試験が終わったときには『ユエルアカニア』の生活は樂しみだと思つていた。

だけどよく考えれば『カードが原因で人殺し』が起きたり、手で破けるカードも『本氣で投げれば金属にも刺さる』とかそんな危ない世界にトリップすることは無いだろ！

しかもGXの場合2年目には光の結社でいろんな意味で危ない人が増えたり、3年目にいたつては超うつ展開とダークネスのせいで一瞬地球が滅びかけたりしてると…！？ もう帰りたい…

そんな事を考へていつに『ユエルアカニア』に着いた。
もう仕方が無い！こんな事を考えずに学生生活を楽しもう…
少なくとも1年間は…

俺は入学式の間、校長先生のありがたくも長く退屈な話を聞き流し、半分寝ていた。

そんな入学式も終わり、俺はレッジ寮に向かう。
なぜレッジなのかは受験番号を見てもらえば分かると思つ。

「おーい、気炎！」

「待ってくださいよ、アーニキ。」

そんな時に、十代がやってきた。何故か翔も一緒に。

「おー、十代。どうしたんだ。」

「早速だけど、俺とデュエルしてくれ！」

は？なんなんだ？この世界では出会つたらいきなりデュエルでもしなきやいけない理由もあるんですか？

「いや、ちょっと荷物置かなきやいけないし、デッキ調整も済んでいないから後にしてもらつてもいいかな？」

「なんだ、そんな事かよ。いいぜ。じゃ、俺達はデュエルアカデミアの様子を見に行こうぜー！」

「わかったツス、アニキ」

よし、この間に禁止・制限の確認を。こいつの世界に来てから世間の様子とかを調べるのに必死でデュエルに関することを何も調べてなかつたからな。

「こー」が俺の部屋かー。なんか落ち着くけど、一人は寂しいな。」

パソコンを開き、早速禁止・制限を見ると…

「おいおいこれじゃあ、MEの勝ちじゃないかwww

しかし俺がいた世界の基準でいくと狂っているしか思えないなwww

「おーい、デッキ構築は終わつたかー？」

十代！部屋に入る時ぐらりノックしろ！

「ああ、早速デュエルしようぜ！」

確かデュエル場はブルー専用だったよな。おい、平等にしろよ。

「「デュエル！」

「俺からいぐぜ！ドロー！」

ちょ w 勝手に先行取るな www 大会だと注意されるぞ。

そういうや5D's のワンポイントレッスンでデュエルディスクが先攻後攻を

勝手に決めてくれるとかいってたな。GX でもそうなのか？

「俺は手札からクレイマンを守備表示で召喚！カードを一枚伏せてターンエンド。」

表守備で召喚とか卑怯じやないか？エアーマンとか召喚するときとか。

十代

L P 4 0 0 0

手札 4 枚

場 場 クレイマン、伏せ 1 枚

「俺のターン。ドロー！俺は仮面竜を守備表示で召喚。さらに苦渋の選択を発動！」

これが禁止じやないとカオスデッキが流行つてているな。本来なら。

「俺はデッキから5枚を選択し、その中から相手は1枚選択する。相手が選択したカードを手札に加え、それ以外を墓地に送る。俺はダークブレイズドラゴン3枚とスキル・サクセサー2枚を選択

する。」

「えーと、どうしようかな。じゃあ俺はダークブレイズドラゴンとスキルを選択するぜ！」

「そして手札断殺を発動！俺はダークブレイズドラゴンとスキル・サクセサーを墓地に送る。」

「俺はバーストレディとネクロ・ガードナーを墓地に送る！」

「互いに2枚ドロー。カードを1枚伏せてターンエンド。」

氣炎
LP 4000

手札 3枚
場 仮面竜、伏せ1枚

「俺のターン！俺は融合を発動！場のクレイマンと、手札のスパークマンを融合！
来い、E・HERO サンダー・ジャイアント！
サンダー・ジャイアントの効果発動！
召喚時に元々の攻撃力がサンダー・ジャイアントより低いモンスター1体を破壊する。

仮面竜を破壊！ヴェイパー・スパーク！」

アニメ効果つていつも思うけど大抵強いよなー。妬ましい。
まあサンダー・ジャイアントはコストがついた代わりに
発動回数が増えたからバランス取れてると思うが。

「バトルだ！サンダー・ジャンアイントでダイレクトアタック！ボ

ルテック・サンダー！

「どわつ！」

氣炎

L P 4 0 0 0 1 6 0 0

「カードを1枚伏せ、さらにスカイスクレイパーを発動してターンエンドだ。」

十代

L P 手札 4 0 0 0
手札 1 枚
場 サンダー・ジャイアント、伏せ2枚

「俺のターン。ドロー！手札から継承の印を発動！

俺の墓地に同じ名前のカードが3枚以上揃っている場合、
そのモンスターのうち1体を復活させ、このカードを装備する。
蘇えれ！ダークブレイズドラゴン！

さらに手札から地獄の暴走召喚を発動！

モンスターが特殊召喚された時、そのモンスターと同名のカードを
可能な限り召喚できる。

ただし相手もモンスター1体に対しても同じ効果を使える。」

「俺のモンスターはサンダー・ジャイアントだから召喚はできない。

」

「俺はダークブレイズ2体を墓地から特殊召喚！
ダークブレイズドラゴンは墓地からの召喚に成功した時、
攻撃力・守備力が倍になる。」

」

ダークブレイズドラゴン

攻撃力	1200	2400
守備力	1000	2000

「手札からハリケーンを発動！魔法・罠を全て手札に戻す！」

「チエーンして速攻魔法発動！クリボーを呼ぶ笛！テッキからハネクリボーを特殊召喚！」

でた、いつもの壁役。

ハネクリボーって大抵こういった場面でしか活躍しないよな。十代は本当にハネクリボーを相棒って思つてゐるのか？

「俺は墓地のスキル・サクセサーの効果を3枚発動！」

このカードを除外し、攻撃力を800ポイントアップさせる。

ダークブレイズドラゴン1体に2枚、もう1体に1枚を使用する！」

ダークブレイズドラゴンA

攻撃力	2400	4000
攻撃力	2400	3200

ダークブレイズドラゴンB

攻撃力	2400	3200
攻撃力	2400	3200

「いくぜ！攻撃力4000のダークブレイズドラゴンでサンダー・ジャイアントを攻撃！」

「ネクロ・ガードナーを除外し、効果発動！攻撃を1度だけ無効にする。」

「なら3200のダークブレイズで攻撃！ダークブレイズの効果も

含め3200ダメージだ！」

「何つ…」わああ～！」

十代
LP 4000 800

「3体目のダークブレイズでハネクリボーを攻撃！効果で300ダメージだ！」

十代
LP 800 500

「カードを一枚伏せてターンエンドだ！」

氣炎
LP 1600
手札 1枚
場 ダークブレイズ3体

俺の伏せカードはリビングデッキの呼び声だ。

ダークブレイズを破壊されても次のターンで3体の総攻撃で勝つことができる。

「なあ氣炎、俺のライフは僅かに500。でもこの状況でも逆転できる。そう考えたらわくわくしないか？」

あれ、まさかさつき解説したせいで敗北フラグが立ったか？いやそんなことは無いだろう

と、思いたい…

「いくぜ！俺のターン！ドロー！戦士の生還を発動！バーストレディを手札に戻す！」

さらに融合を発動！フェザーマンとバーストレディを融合！」

ああ、終わった…せつかく死者蘇生とか第六感とか強欲とか入れてきたのに

「来い、E・HERO フレイム・ウイングマン！そしてスカイスクリイパーを発動！
フレイム・ウイングマンでダークブレイズに攻撃！スカイスクリイパー・シユート！」

フレイム・ウイングマン
攻撃力 2100 3100

氣炎

L P 1600 900

「フレイム・ウイングマンの効果でダークブレイズの攻撃力の1200ポイントのダメージを受けてもらつぜ！」

氣炎

L P 900 0

「ガツチャ！楽しいデュエルだつたぜ！」

「ああ、俺も久々に楽しかつたぜ。」

「アニキ～、早くしないと新入生歓迎会が始まっちゃいますよ～。」

「何つ～急ぐぞ～氣炎、翔！」

「おうー。」

なんだかんだで新入生歓迎会は楽しかったし、なにより十代どじゅエルできたのがよかつた。

けれど、寝ようとした直前に生徒手帳でメールが来た。

『やあ、ドロップアウトボーイ。午前0時、デュエルフィールドで待つている。

互いのベストカードを賭けた、アンティルールでデュエルだ。勇気があるなら来るんだな。』

万丈目、寝る前にメールなんて送るな。

第一話 解説＝？（後書き）

いつかオリカを出すかもしだせんが、
まだ案がまとまってないのでつと後になります。

第三話 夢?いいえ、現実です。（前書き）

最近良いカードがあたらない・・・

第三話 夢？いいえ、現実です。

とつあえず、この万丈目のメールをどうするべきか。

- 1・無視
- 2・とりあえず「行きたくない」と返信する
- 3・デュエル場に向かう

よし、無視しよう。初期の万丈目の『デッキはたしか『地獄』『ヘル』がついていればなんでもアリの『デッキ』だったはずだ。間違いなく弱い。ノース校から帰ってきたら『デュエル』しよう。

しかし…

言い訳がめんどくせー！

万丈目のことだからどうせ後でドロップアウトだのなんだのバカにしてくるのは明白だし、

眠かったとか『デッキ調整』をしていたら寝ていたとかそんなんじゃ納得しなさそうだしな…

もうこんな事を考えるのはやめよう

とりあえず1時間ほど『デッキ調整』して寝よう

「紅を『テッキ』に入れるべきか入れないべきか・・・」

「とりあえず苦痛は3積み確定で」

「創世神、今までありがとうございました」

「なんだかんだで『テッキ』構築を終え、すぐに寝た。

「なんか、『デュエルアカデミア』に来て一日しかたっていないのに、凄く疲れたな。」

「おい」

「ん？」

「おい、起きるよ」

「なんだ？万丈目か？」

いや、違う。十代でもないし、翔でもない。

そう、そこにいたのは満足神こと地縛神 Ccapac Apuだつた！

「なんだこなんとこ！JUCApac Apuがいるんだ！第一回の世界はGXであって5D、うじやないだろ！」

「いや、驚かせてすまなかつたね。私は神。君の神としてのイメージで一番近い姿で来ることにしたんだ。」

いや、確かに神ではあるが。

「まあ、そんなことはどうでもこことして、今後のことをついて聞きたいいんだが。」

え？ どうこうこと？

「とりあえず、君がこの世界に来てしまったのは私の不手際なのだ。

だけれど、このことを他の神に知られたら私はクビだ。

本来なら他の神に相談して君をもとの世界に帰すべきだとは思ったが、

クビにはなりたくないのこうして相談に来た。さあ、どうする？

ああ、なんて自分勝手。もとの世界に返りたいといつても、こいつの性格、じゃ絶対に反対する。

多分朝方まで。しかし、この世界もある意味悪くないよな。生活は快適だし。カオスな所はあるが。

「さあ、どうするんだい？ 望めば精霊もあげるし、なんなら現実的に考えて無理なカード以外を全てそろえたファイルをあげようか？ メインストーリーのメンバーにも入れてあげるし。」

こいつ、交換条件まで出してきやがった。なんて汚い。でも悪くは無い条件だな。

主人公達と一緒にいられるのもいいし、なによりカード全てといつのも魅力的だ。

「ちょっと聞くけど、シンクロ使って良い？」

「だめだ。流石に世界観が壊れる。」

駄目だとはなんとなく分かっていた。分かっていたけど聞きたかった。

「じゃあ、精靈とメインメンバー入りで。」

「よし。契約完了。じゃあお休み。」

「…。早つーもう消えたしー何なんだこれはーもうわけが分からぬ。とつあえず寝よつーこれはきっと夢だー…と思いたい。」

翌日。

あー。寝不足だ…。最近ろくな寝ていかない気がする。デュエルアカデミアに来る前までは徹夜でこの世界の様子を調べていたし、昨日はあんなことが…

あれは夢だったのか？精靈が出てきてないし、メインメンバーにはいつたかどうかも分からないし…

『キュウ～。』

「わつー。」

顔を洗おうとしたら、鏡にデュエルアカデミアが映っていた。

「お前、精靈だよな？」

『キュー。』

返答の仕方がよく分からぬが、精靈のようだ。早速十台に見せに行くか。

ちょっと待て。十代がハネクリボーを初めて見たのは…

タイタン戦だ。まだ十代はハネクリボーのことを知らないんだ。

『キュー？』

「とりあえず、これからよろしくな。」

『キュー。』

「それじゃ飯食いに行きますか。」

食堂にて

「やつぱレッド寮の飯は上手いなー！」

「いや、アニキ。そんなにおこしくないですよ。』

「ところで十代。昨日万丈田とトコエルしたらしいな。』

「げつ。何でばれているんだ。」

「昨日1~2時、『』のやけに騒がしかったから、どうせ万丈田の挑戦を受けに行つたんだ。」

「へへ…」

「でもなんで氣炎は万丈田君から挑戦があつたこと知つてるんスカ。」

「

「いや、俺のところにも挑戦があつたから俺と同じでクロノスを倒したお前にも挑戦があつたんじゃないかなって思つてな。安心しろ。学校にばらしたりはしないから。」

「ありがとう！氣炎！」

「いや、今後もよろしくな。」

第三話 夢？いいえ、現実です。（後書き）

次回はぜひしようか・・・

第四話 月一試験—満足をせしむれよー（前書き）

シンクロ出したい…

しかしシンクロ出すと主人公が無敵に…

第四話 月一試験！満足をさせてくれよー！

気がついたら月一試験の前日の夜になっていた。

翔のラブレター（偽）事件にもまつたく関わらず、平凡な毎日を送っていた。

十代と共に行動することが多いので、明日香とも知り合いになり、まあ人間関係は充実している。

さて、月一試験に万全の姿勢で臨むために、テッキ編成をしていた。

勉強の面では、十代と翔は授業中寝てることが多かつたが、俺はまじめに授業を受け、予習・復習をしつかり行っていたので、ある程度余裕だった。多分中の上ぐらいの成績は取れるだろう。

肝心の十代と翔は、十代はテッキ構築を終え、即寝てしまい、翔はなぜか『死者蘇生』4枚に対しても祈りをしている。
死者蘇生が4枚…。いいな…、あれ、欲しいなあ。

そんな冗談は置いといて、部屋に戻りますか。

「やあ、久しぶりだね。」

…。あれ、これ前にもあったような？ああ、俺寝ぼけてるのか。よし、決意を新たに、もう一度。

「私がいただけで閉めるなんて冷たいな。」

「うん。夢じゃない。あつはつは。ビーリショウ。

俺の部屋にいたのはどうみても前回でおなじみの満足神様です。本当にありがとうございました。

ああ。ここつぶやつやつて追い返そうかな。

「追い返すとは酷いな。仮にも神だぞ。」

心を読んだか。流石に神だけはある。

「で、今度は何のよつ? もう寝たいんだけど。」

「君にいろいろと説明したいことがあってね。まず君がこの世界にトリップしたのは、本当は他の人を飛ばすとき、間違つて君も一緒に飛ばしてしまったんだ。その時はやつちまつたNE なんて思つたけど、面白そうちから放置したんだ。」

「面白そうちからだとーお前の楽しみだけの目的かよー?」

ああ、なんでよつによつてこの神なんだつ。他のだつたらむつりよつともだつたかもしれないのに。

「過ぎたことを後悔しても遅いのだよ。黒木氣炎君。

あと他に言つたい事は、君の行動によつてストーリーが変化するからな。

あまりにも自重しないとコベルが世界を超融合して『遊戯王GX』完~』なんてこともあるからな。
慎重に行動しなよ。」

後悔とか慎重に行動とかは俺があんたに言いたいよ。

ストーリー変化はヤバイな。さすがにサブイベント的な物が追加されても、主要ストーリーが変わつたら俺は高橋先生に存在を抹消されてしまう。

「まあこの世界でがんばれよ。あ、本来登場しないキャララが登場したら俺を呼んでいいから。

あとカードをやる。お前のデッキで最大限に生かされるカードだ。」

オリカじやないか。このカード本当に使つていいの?大丈夫なの?

「問題ない。神の作つたオリカだからな。じゃあな。」

だから消えるのはやいつて!なに、いきなり人の目の前に現れていきなり消えるなよ!

まあこのカードは超強力つてわけじゃないけど、それなりのパワーがあるしな。

このカードをデッキに無理なく入れられるようにしてから寝るか。

「しまつた、寝坊した!」

昨日俺は徹夜でのカード達を有効に使うための戦術を考えていたら、寝たのが3時。

あと30分で試験が始まつてしまつ。

「いそいで飯食わねーと。」

こんなに遅刻しそうなのに、朝食はしっかりとする。なぜだろ? 現実でもいつもそうだったな。

着替えも終わり、あと10分。このままダッシュで行けば間にあつかもしれない。

「行くぞ…。うおおおおお!」

開始1分前でギリギリついた。俺は全速前進できたため、もう体力が無い。

試験の中頃で十代たちが来た。お前ら、堂々と遅刻しやがって。俺なんか肉体的ライフを〇にしてまで来たって言つの!。

試験終了。最初の方は疲労の方でひくに考えられなかつたけど、まあ悪くは無かつたな。

デュエルに関する問題は基本的なデュエルのルールとかそんなんばつかで簡単だつたな。

スナイプストーカーを『我が身を盾に』で無効にできるかどうか。当然できないだろ。破壊は不確定要素なんだから。

さて、十代たちのどこに行きますか。

「十代、翔、結果はどうだった。」

「ああ、寝てたからわかんないぜ。」

俺があんなに疲労と格闘して必死に答えを導き出したのここにはその間に…。

「僕はあんまりできなかつたから、デュエルのほうがんばるしかないッス。」

「やあ、みんな。テストはどうだった。」

「おひ、三沢。俺は寝てたぜ。」

ああ、三沢。お前がいるとまともな会話ができるいいぜ。特に、デュエルについての話題では、アドバンテージについて徹底的に考えた合つたり、実用的なコンボ、ネタカードの使い道その他諸々のことと相談できるからある意味一番頼れる。

「まあ、俺はまづまづかな。少なくとも毎年とか退学とかそんなことは無いな。」

「そうか、といひでお前のデッキ、お前は『ネタたっぷり』とか言つてゐるが、結構強力だと思つが。」

驚いた。この世界ではこのデッキは強力なのか。

現実では帝に相打ちにされ、ゴヨウで奪われ、オネストで迎撃。ライロに裁かれ、剣闘獣にいじめられ、次元で除外。満足ワンキルされたこともある。

色々酷い結果だったのに。

「あんまつそりは思わないけどな。」

「いや、収縮やフォースによってステータスを下降させ、ダークブレイズのダメージ量を増やし、一気に敵を倒す。なかなかのビートバーンだと思つたわ。」

「まあ、戦闘サポートを除けば、最高攻撃力が2400だから、そこをつけば簡単に倒せると思うんだけどね。」

「ふん、オシリスレッドのドロップアウトときの「トッキ、しゃせんそんなものだろうな。」

うわー。万丈目、多少は空氣読めよ。

「ま、簡単に攻略できる「トッキだしね。クロノス先生に勝ったのもマグレ。」

十代にだってあっさり逆転されたしね。多分ブルーのお前とやつても俺の負けだと思つけどね。」

「ふん、クロノスに勝つて調子に乗つて居るのかと思つたが、そうではなかつたか。

レッドなど、エフート中のエフートである俺達に勝てる道理などないのだ。

ところで、俺の挑戦を断つた理由はなんだ。」

えー。これどう答へりやいいの?。お前が弱いからなんていつたら確實に怒るしな。

「あんな時間に『テュエルをやめる』とせ、アンティは校則に反するからね。

なにより眠かったし。」

「貴様、『眠気』とまで挑戦を断るとせ、俺に喧嘩を売つていいのかどうしよう。逆効果だつたみたいだ。誰かこの『眠気』を変えてくれー！」

「あなた達、何をしてくるの。」

「天上院君。いや、ここが俺に喧嘩を売つてくれるのではね。」

「クロノス先生が呼んでいるわよ。戻った方がいいんじゃない。」

「ちつ。立ち上るが。お前達。」

「待つてくださいよ、万丈田さん。」

取り巻き一人を連れ、万丈田は去つていった。

「明日番、ありがとう。流石にあの空氣はまづかった。」

「いや、いいのよ。それより、試験の結果はどうだったの。」

みんなそれ聞くよな。まあ、試験後なんてそんなもんか。

「まづまづだね。『テュエルのまつもがんばるか。その前に昼食代わりとしてドローパン買つて来る。』

「そういえば、今日の昼の購買では、新しいパックが発売されるらしいッスよ」

「何！みんな、急ぐぞ！」

十代、カードの発売情報とかはしつかり調べた方がいいぞ。

「俺はいい。氣炎と明田香は行かないのか。」

「こきなり違うカードを入れるとデッキが回らないから。」

「俺はもつ通販で1箱予約してあるから。多分帰つたら届いてるだろ。」

この世界でも箱買いというものが存在することには驚いた。
俺は現実では月に1箱買つてたからな。週間が変わらずにこじらぎをしてはありがたいけどな。

「クロノス先生、お呼びでしょうか。」

「よく来たノーネ。シニヨールには、ドロップアウトボーイ、遊城十代を倒して欲しいノーネ。」

「わかりました。クロノス先生。とにかく、もう一名、黒木氣炎はどうするつもりでしょうか。」

「私が対戦相手を細工しておくノーネ。これであの二人は終わりナ

「ノーネ。」

「おっ、十代、翔。戻ってきたか。」

「で、いいカードは当たったのかい。」

「それが、カードが売り切れてたん исス。」

「俺は朝トメさんを助けたおかげで、1パックだけ買えたけどな。」

「ああ、そんな」ともあつたな。確かに進化する翼が入っていたんだよな。

「そう、そろそろ実技が始まるわよ。」

「まずは、ラーアイローラー、シーコール三沢ナーノーネ。」

「早速俺の出番か。」

「対する相手は、オシリスレッド、「

ああ、三沢と並ぶ人、とりあえずドンマイト。一応ラーアイローラー主席だしあつ勝ち田は無いな。」

「シーコール黒木ナーノーネ！」

「え？ 三沢、今クロノス先生は誰の名前を書いた？」

「お前の名前だが。」

「やつぱりか。できれば当たりたくなかったんだよ。」

三沢は空氣とか色々言われているけど、その眞の正体は『テッキを複数持つ』『メタテッキ』を使い。

当然俺は原作を見てきてる。三沢がどの『テッキ』で『デュエル』するかは明白だ。

(ウォーター・ドリゴン)テッキだよなあ…)

「まあ、当たってしまったものは仕方が無い。楽しへテュエルしようぜ。三沢。」

「ああ、俺も全力でいく。」

「「デュエル！」」

第四話 月一試験-満足神は自重しません。-（後書き）

今後も満足神は自重しません。

次回はV.S三沢です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540k/>

遊戯王～黒き火炎～

2010年10月15日01時29分発行